沖縄の過去を未来に

高松市立多肥小学校　六年　植松　みらい

七月。夏の日差しがサンサンと照りつけるようになったころ、ぼくのとなりの席に、沖縄から転校生がやって来た。名前は空（そら）くん。初めは、おたがい犬を飼っていることや、ゲームの話などの共通の話題で意気投合し、仲良くなった。それから何度か空くんの家に遊びに行くようになった。空くんの部屋には、沖縄のものがたくさんあった。澄んだ真っ青の海と純白の砂浜の写真。サンゴや大きなヒトデ。シーサーの置き物。ぼくには、身近にはない目新しい物ばかりだった。空くんは、よく沖縄の話をしてくれた。その話はまるで日本ではない、どこかの外国のような話だった。

「沖縄の方言でありがとうって、にふぇーでーびるって言うんだよ。外国語みたいで変わっているでしょ？」

沖縄の話を聞かせてもらうたびに、ぼくは、いつか沖縄に行ってみたいと思うようになっていた。

夏休みが近付き、教室では夏休みの予定や旅行の話などで盛り上がっていた。ぼくは、親が仕事でいそがしく、夏休みは特に予定もなかった。

「そういえば空くんはどこかでかける予定はあるの？」

「沖縄のおじいちゃん家へ行くつもりだよ。」

「へえ、いいなぁ。」

空くんがすごくうらやましかった。

「あっ、お母さんが言っていたんだ。もし良ければ、一緒に沖縄行かない？って。」

それを聞いて一瞬びっくりしたが、同時に飛び上がるほどにうれしかった。一番仲の良い友達と念願の沖縄へ行くことができるのだから。家に帰ってお母さんにおさそいの事を話すと、

「あらよかったじゃないの、ねえ。でもその時、お母さん仕事なの。一人で大丈夫？空くんの家のみんなに迷惑かけないのよぉ。」

心配性かつおせっかいなお母さんの話がめんどうくさくなり、ハイハイ、とだけ返した。

沖縄旅行当日。飛行機で何時間もかけ、那覇空港についた。青い海と空がまぶしい。あちらこちらでシーサーが手招きをする。まるで、海外の南の国にいる気分だった。それから空くんの祖父母の家へ行った。みんながぼくのことを大歓迎してくれた。見たことも食べたこともないおばあさん手作りの沖縄の郷土料理を味わった。翌日にはみんなで海のレジャーへ行き、色鮮やかな熱帯魚やサンゴを間近で見て楽しんだり、空くんとサイクリングをしたりと、ぼくは、かつてないほどこの旅行を楽しんだ。

そして最終日。朝起きて空くんのおじいさんが、たずねてきた。
「きみは沖縄戦のことを知っているかな。」
「えっ、ハ、ハイ。」
とっさに返事をしてしまったが、実は沖縄戦のことはよく知らない。戦争の事は社会の教科書にものっているし、校外学習では広島の原爆ドームにも行ったが、沖縄戦について学習する機会がなかったからだ。今日はそれを学びに、三人で沖縄戦の記念館と、お墓参りへ行くことになった。年若くして戦死した、おじいさんの兄の誕生日だったからだ。これから悲惨な戦争の過去を学びに行くというのに、外は雲一つない快晴の空が広がっていた。記念館に行く途中、おじいさんが沖縄戦のことを簡単に話してくれた。
「沖縄戦は本土の戦争とはちがって、米軍が直接上陸してきて沖縄そのものが戦場になってしまったんだ。」
その話を聞いた時は（本土の戦争とそこまで大きな違いはないと思うけど。）と考えていたが、沖縄戦はぼくが想像していたよりもはるかに悲惨なものだった。記念館の展示を見ておどろいた。そこには、空からの爆弾の投下にくわえ、陸からは、大砲や火炎放射器でおそわれ、艦砲射撃で海からも狙われた。これらを米軍は、ありったけの地獄を集めた戦場と呼んでいたことが書かれていた。さらに米軍の攻撃を受けただけでなく、自ら命を絶つ自決で亡くなった人が大勢いる。生きて捕虜（ほりょ）になるくらいなら死を選べ、と教えられており、ぼくよりも小さな子たちが毒薬で自決していた。そういう、今までは考えられない恐しい事が起きていて、激しいショックを受けた。自分がもし沖縄の戦争の時代に生きていたら・・・なんて考えると胸がキュッとしめつけられた。別の展示コーナーには、戦争で亡くなった方の名前と一緒に顔写真がかべ一面にずらりとならんでいた。その中に、おじいさんの兄の名前もあった。おじいさんも空くんも暗い顔をしていた。その二人の顔を見ると、暗い館内がより一層重々しく感じ、ぼくは向かいにあるガラス張りの展示ケースに目をそらした。そこに、当時の人が持っていたであろう革製の四角いかばんとロープ、さびた水筒、そして一枚の家族写真がディスプレイされていた。写真の中の四人はみんなどこか嬉しそう。きっと家族仲が良かったのだろう。そう思いながら写真を眺めていると、一瞬、頭の中に映像のようなものが流れてきた。モノクロで分かりにくかったが戦時中の物のようだ。轟音（ごうおん）とともに巻き上がる土煙。いたるところが火の海と化している。うめき声も聞こえた。映像が消え、ふるえながら何だったんだろうと写真をもう一度見ると家族全員から笑顔が消えていた。記念館の見学を終えて、お墓参りへ行った。ここには沖縄で戦死した人たちが大勢眠っている。花をそえて静かに手を合わせる。安らかに眠ってください・・・と。心の中でいろんな感情が渦巻いている。すると、またあの映像が見えた。今度は、もっとハッキリと。サイレンの音がキンキン頭にひびく中、何か、声が聞こえた（もっと家族と一緒に過ごしたかったな・・・弟は無事だろうか・・・どうか弟だけは・・・！）と。誰かの戦時中の記憶だった。空くんの祖父母の

家に帰って、このことを話すと、おじいさんはあわてて部屋から一枚のシミだらけで、古ぼけた写真を持って来た。それは、記念館に展示されていたものと、まったく一緒だった。おばあさんがおだやかな顔で、

「きっと伝えたいことがあって、お兄さんはここに来たのよ。」

と言った。それを聞いたおじいさんは、ポロポロと涙を流した。

ぼくはよく両親に対して、腹が立ったり、うっとうしく感じることがあり、気に入らない事から逃げたり、返事をせずだまっていたり、そのたびにお母さん達を困らせていた。でも、家族に対しての考え方が変わった。両親が支えてくれるから今のぼくがいるのだ。家に帰ったら、きちんと面と向かって話をしよう。そして、戦争の恐ろしさ、おじいさんのような戦争を体験した人が少なくなっていること。これを次の世代につなげるために、まずは身の回りの人に戦争を知ってもらえるような作文を書こう。そう強く誓った。

「よし、最後にかき氷でも食べに行くか！」

「大賛成‼」

ぼくと空くんは真っ先に外へかけ出した。真っ青な空の下笑い声が絶え間なく聞こえる。こんな何気ない日常の幸せが、いつまでも続くように願っている。